

Y07b 大学における天文学の授業: 内容の評価と検討

鴈野 重之 (東大総合文化)、縣 秀彦 (国立天文台)

近年、大学における授業の改善の機運が高まっている。その一環として、学生による授業の評価を実施する大学が増加しているが、これらの授業評価の多くは授業方法に関するものであり、授業内容に触れるものではない。よって、学生のニーズに授業が応えているか否かはこれらの調査からは見えてこない。そこで本研究では、三大学における教養課程の天文学 / 宇宙科学の授業四講座の受講生 400 人以上を対象とした大規模なアンケート調査を行い、天文学に対する学生の興味を調べた。

アンケートでは太陽・恒星・星雲・銀河・ブラックホールなど、合計 13 項目のキーワードについて、興味の度合いと知識の度合いを 4 段階自己評価で回答してもらった。その結果、学生がもっとも興味を持っている事項はブラックホールであり、以下宇宙論、タイムマシン、宇宙生命と続くことがわかった。一方で、星雲や恒星、コンパクト天体などは関心が薄かった。興味深い点として、太陽系のように小中高校で繰り返し学習している天体についての知識は非常に高い一方、それらの天体に関する興味はあまり高くはなっていないことなどがわかった。このことは、大学以前における詰め込み型の授業が知識の向上には繋がっているものの、学生の興味を引き立てるにはあまり貢献していないことを示唆するものと考えられる。

発表においてはより詳しい結果とその考察を紹介する。